

「自由と平和のための京大有志の会声明」

2015年08月13日

戦争は、防衛を名目に始まる。
戦争は、兵器産業に富をもたらす。
戦争は、すぐに制御が効かなくなる。

戦争は、始めるよりも終わるほうが難しい。
戦争は、兵士だけでなく、老人や子どもにも災いをもたらす。
戦争は、人々の四肢だけでなく、心の中にも深い傷を負わせる。

精神は、操作の対象物ではない。
生命は、誰かの持ち駒ではない。

海は、基地に押しつぶされてはならない。
空は、戦闘機の爆音に消されてはならない。

血を流すことを貢献と考える普通の国よりは、
知を生み出すことを誇る特殊な国に生きたい。

学問は、戦争の武器ではない。
学問は、商売の道具ではない。
学問は、権力の下僕ではない。

生きる場所と考える自由を守り、創るために、
私たちはまず、思い上がった権力にくさびを打ちこまなくてはならない。

上記のように「自由と平和のための京大有志の会」は「声明書」を出した。分かり易く、説得力があると大きな関心を集めている。簡潔で、意を尽くした「声明書」である。

戦争をしたい者たちは平和が脅かされる、命が守れないと危機感を煽り、国民の見えないところで軍備を準備し、起こす。起こったら、理由をつけて国民を総動員する。かつて天皇の赤子として、天皇のために死ぬことを至上の価値とされ、戦場に送られた。兵士たちは殺し殺される地獄で命を落とした。兵站を欠いて、6割の兵士が餓死、病死した。生き残った兵士たちも心に深い傷を残した。一般人も、内外の各都市も甚大な被害を受け、戦場と銃後の区別はなかった。その中で、軍需産業者だけは儲けた。人間の犯す罪で戦争ほど大きいものはない。命は他人のものではなく、死に至るまで、私のものとして所有すべきものである。平和的生存権は人間の基本的な権利である。

自然は戦火で焼いてはならない。人を支え、いやす美しさを保全しなければならない。精神、学問は自由の下で、明日の歴史を切り拓く力である。権力に仕える奴隷ではない。

「無関心」の罪も重い。無関心は時の流れを肯定、支持する声に加担することになる。伊丹万作氏は「だまされることもまた罪の一つ」と言っている。法的安定性は関係ないと言って、押し通す「安保法案」の憲法違反は明白である。騙されてはならない。一方の国々に偏る安全保障条約から、万国に平和貢献する国を目指す時である。